

書評 02

NHK 放送文化研究所 編

『現代日本人の意識構造 [第八版]』

日本放送出版協会 / 2015 年 2 月刊 / 296 ページ / 1500 円 + 税
ISBN 978-4-14-091228-7

評者：竹野 豊

京都大学大学院経済学研究科博士後期課程



日常生活の中で誰しもが一度は考えたことがあるであろう「日本人らしさとは何か? 急変する現代社会の中で日本人の意識は変化しているのか?」そんな疑問に対して科学的に答えを出そうというのが本書である。

本書は「日本人の意識調査」(NHK 放送文化研究所実施)を用いた経年調査の結果とその分析についての報告書である。「日本人の意識」として、日本人のものの考え方や価値観を調査している。具体的な調査項目としては、「男女と家庭のあり方」「政治」「国際化」「ナショナリズム」「宗教」「仕事と余暇」「日常生活」「生き方・生活目標」である。前記項目の変化を加齢、世代、時代の 3 要因から分析している。また、男女での意識の違いについても言及している。分析時には、研究論文や他調査(国勢調査等)の結果も用いている。

「日本人の意識調査」の概要を述べる。NHK 放送文化研究所により 1973 年から 5 年ごとに実施されている調査である。今回(2013 年)で 9 回目となり、40 年分のデータが集まったこととなる。調査方法としては個人面接法を用い、サンプルとしては 16 歳以上の男女で有効サンプル数は 3000 以上。基本的な調査項目と手法は第 1 回から変更していない。(一部追加調査項目あり)

本書の構成としては、I が序章、II から VII で各項目の分析、VIII が終章となっている。終章では、「意識の変化がいつ、どの領域で生じたのか、

日本人の意識の構造が時代ごとに、さらには世代ごとにどのように変化してきたのかについて検討する。」(p.227) というように、毎調査ごとでの変化、40 年間での変化を分析している。特に今回は東日本大震災後の最初の調査ということで、その影響も検討された。

次に内容を検討していくのだが、ここでは各項目の詳細な内容ではなく、調査全体のまとめである終章の内容について検討していく。まずは 40 年間に大きな変化があった項目についてである。「家族・男女関係」が最も大きな変化をしており、その方向も一定である。「男女と家庭のあり方」の変化の特徴である男女平等意識の拡大、家族の個人化という方向に向かっている。

次に、08 年と 13 年の変化の大きな項目である。「政治」での変化が大きい。具体的には、日本人についての意識や、天皇に対する感情、政治課題、支持政党で変化が大きい。「政治」での変化は毎調査において他項目より変化が大きく、今回も同様の傾向が続いている。40 年間でも変化は少なくないが、同じ選択肢の割合が増えたり減ったり、一方向の変化ではない。これは日本人の政治に関する意識はとても変化しやすいということを示しているのであろうか。

逆に変化の少ない項目についても検討する。40 年間であまり変化がなく、高い選択率をほこる意識つまり多くの人が共有している意識、これは日本人が持つ基本的意識といえるであろう

う。特に、40年間常に80%以上支持されてきた「年上の人には敬語を使うのが当然だ」「日本の古い寺や民家に親しみを感じる」「日本に生まれてよかった」などは日本人の意識構造を考えるうえで重要となるであろう。ただし、このような基本的意識も将来的には変化する可能性も否定できない。

今回は東日本大震災後の最初の調査ということで、意識に大きな変化が生じることも予想された。しかし、結果としては大きな変化は確認できなかった。その原因として調査が東日本大震災発生より2年半が経過していることが挙げられている。震災直後には一時的な日本人の行動変化が確認され、調査によっては意識変化が確認されたが、本調査では大きな変化は確認できなかった。これは「一時的には表面的な行動変化はしたが、意識変化までは至らなかった」ということなのか、あるいは「一時的に意識変化はしたが、意識変化は震災前にまた戻った」ということなのか、興味深い課題である。

最後に数量化Ⅲ類による解析結果として日本人の意識の基本軸として、「伝統志向—伝統離脱」「あそび志向—まじめ志向」という軸を提案している。またそれに基づき、時代ごと、世代別に分析を行っている。時代ごとの分析では、「あそび志向—まじめ志向」については40年間ではそれほど大きな変化はなかったが、「伝統志向—伝統離脱」については03年までは「伝統離脱」それ以降は「伝統志向」の傾向が強まった。世代別の分析では、「あそび志向—まじめ志向」は違いが小さいが、「伝統志向—伝統離脱」は違いが大きい。更に「伝統志向—伝統離脱」については、①若い世代ほど「伝統離脱」②一つおき（親子）の世代に重なりはない③同時期比較では、上の世代がより「伝統志向」（団塊ジュニアと新人類ジュニアを除く）④全世代で同じ方向への変化が多い、また「あそび志向—まじめ志向」については、⑤戦争世代や第一戦後世代に比べ、新人類世代や団塊ジュニアは

変化が大きい⑥同時期比較では、第一戦後世代は戦争世代よりも常に「まじめ」⑦各世代で移動の方向が異なることが多い、と分析している。以上が内容についての検討である。結果としては、世代ごとの違いが浮き彫りとなった。

本書（本調査）の特筆すべき点はそのデータサンプル数と長期継続性である。前者は個人面接法でこれだけのサンプル数を集めるのは困難であり、それだけでも大きな価値がある。近年成長著しいインターネットを利用したアンケートにより多くのサンプル数を得ることは容易になったが、面接法での多くのサンプル数獲得は困難である。また、このような経年調査は長く続けていくほど価値が上がっていく。現在までに40年分のデータが集まっており、今後も継続していくことで更に価値が上昇していくことは間違いない。一方で、本書の分析にはやや物足りなさを感じる部分も残る（特に各項目について）が、それについては研究者がより深い分析をすることにより、より明確な日本人の意識構造を明らかにしていければと考える。

最後に本書の貢献について考える。序章でも「自分の属するコミュニティだけでなく、『見知らぬ人たち』がどのような考え方をもっているのかを知ることは、自分が生きる社会や未来を考える上で、きわめて重要なことだと考えています。」(p. 5)とあるように、似たもの同士が集まりやすい自分のコミュニティ以外に視野を広げることに役立つ。つまり、我々が日常生活を営むうえで、新しい人と接触するのに役立つであろう。また、実業家や研究者にとっても過去から現在までの日本人の意識を知るための価値あるデータとして利用可能である。日本人を対象に商売や研究をするのであれば、知っておいて損はない。